

## 中・高等学校の探究的な学びのある授業

### —「フルコース」を目指しつつも、まずは「アラカルト」で実践しよう—

学習指導要領（中学校）では、第3章1（1）で「（略）理科の学習過程の特質を踏まえ…（略）…科学的に探究する学習活動の充実を図ること」と示されていることから明らかなように、「探究」は重要である。ちなみに、「科学的に探究」の語句は目標の中だけでも、以下のように4回も使われている（下線は筆者）。

自然の事物・現象に関わり、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象を科学的に探究するために必要な資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 自然の事物・現象についての理解を深め、科学的に探究するために必要な観察、実験などに関する基本的な技能を身に付けるようにする。
- (2) 観察、実験などを行い、科学的に探究する力を養う。
- (3) 自然の事物・現象に進んで関わり、科学的に探究しようとする態度を養う。

しかし、中学校では、探究的な学びのある授業の実践例は少ないようだ。現場の先生方の話に耳を傾けてみると「教科書には探究と書いてあるが、基礎的な内容を指導するだけで精いっぱい、授業時間が足りない」という素朴な声上がる。「探究と言っても、どんな実践をしていいのかわからない」「系統的な知識や技能が身に付いていない本校の生徒には、探究はさせられない」「学年ごとに重視する学習過程と教科書の教材が整合しないので、探究学習ができない」などというネガティブな声も聞こえてくる。さらに「発展的な内容の学習を読み替えて、探究の学習としている」という勘違いの事例もあるようだ。

ここで、学習指導要領・解説に示されている（右図）8つの学習過程の例示を全て行うことを、レストランのメニューに例えて「フルコース」と表現する。年間指導計画にその「フルコース」を位置付けるのは、ベテランの先生でも簡単ではない。もちろん、すべての単元を「フルコース」で行うとすると、授業時間が足りなくなるのは明らかである。まして経験の浅い若手教師にとって、1単元であっても「フルコース」が難しいことは、容易に想像がつく。

学習指導要領・解説（中学校）の p.27 には、学習過程の例示の扱いについて、以下のように記されている。

（略）決して固定的なものではなく、問題の内容や性質、あるいは生徒の発達の段階に応じて、ある部分を重点的に扱ったり、適宜省略したりするといった工夫が必要である。

8つの学習過程のうち1つ（せいぜい2つか3つ）を重点として行うのは、比較的やりやすい。これを「フルコース」の例えに応じて「アラカルト」と表現する。実際の授業では、この「アラカルト」で、探究の過程を上手く組み合わせて、年間指導計画を立てるのが現実的である。順序は無関係でよいが、学年ごとに重視する学習過程を踏まえたり、8つの探究の過程が1年間で少なくとも一度は行われたりするようにしたい。

本特集では、「今まで以上に、中・高等学校で探究的な学びを推進する」という趣旨で、従来ある指導計画の大きな変更をせずにできる探究の「アラカルト」な実践事例を紹介する特集を組む。経験の浅い若手教師でも無理なくできる実践しやすい事例を紹介していただきたい。

